

会 議 録

| | | | | |
|-------------|-----------------------------|--|-------|-------|
| 会議の名称 | | 第5回つくば市不登校に関する児童生徒支援検討会議 | | |
| 開催日時 | | 令和4年（2022年）7月13日 開会10:00 閉会12:00 | | |
| 開催場所 | | 本庁舎6階 第1委員会室 | | |
| 事務局（担当課） | | 教育局学び推進課 | | |
| 出席者 | 委員 | 森田充教育長、柳瀬敬委員、倉田廣之委員、成島美穂委員 | | |
| | その他 | 筑波大学人間系心理学域准教授 飯田順子氏 | | |
| | 事務局 | 教育局 局長 吉沼正美、次長 飯泉法男、次長 久保田靖彦 学び推進課 課長 岡田太郎、参事兼教育相談センター長 久松和則、 課長補佐 東泉学、主任 淀純一郎、主任 巾崎一真 | | |
| 公開・非公開の別 | | <input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 | 傍聴者数 | 3人 |
| 非公開の場合はその理由 | | | | |
| 議題 | | 不登校に関する児童生徒支援の検討 | | |
| 会議録署名人 | | | 確定年月日 | 年 月 日 |
| 会議次第 | 今後の不登校に関する児童生徒支援のあり方の検討について | | | |
| < 審議内容 > | | | | |

○教育長

それでは定刻になりましたので、つくば市不登校に関する児童生徒支援検討会議を始めさせていただきます。本日は、筑波大学人間系心理学域准教授の飯田順子先生をお招きし、不登校児童生徒に対する支援の現状と課題に関するお話をまずいただきたいと思います。先生よろしくお願いいたします。そのお話をいただいた後に、皆様と意見交換という形で進めさせていただきたいと思います。では、最初に、飯田先生の御紹介を学び推進課からお願いいたします。

○事務局

それでは、飯田順子先生をご紹介させていただきます。飯田順子先生は、現在、筑波大学人間学群心理学類准教授でいらっしゃいます。主に、筑波大学東京キャンパスで勤務されており、本日は、わざわざ東京からお越しいただきました。学校心理学、スクールカウンセリングが専門分野で、不登校に関しても豊富な見識をお持ちです。主な著書として、いじめ予防スキルアップガイド、エビデンスに基づく安心安全な学校づくりの実践、よくわかる学校心理学などを執筆されているだけでなく、学校心理学会、教育心理学会等にも所属されるなど幅広くご活躍されております。筑波大学では、つくば市の教員の内地留学のご指導をしていただくなど、以前からつくばの教育のために大変お世話になっております。また、つくば市教育相談センターのスーパーバイザーを引き受けてくださっており、教育相談センターに寄せられる不登校の相談等についても、専門家というお立場からご助言等いただいております。本日は、専門家というお立場からのお話と検討会議メンバーとの意見交換から、不登校児童生徒へのよりよい支援のヒントを得られればと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

○教育長

それでは早速でございますけれども、飯田先生から、不登校生徒に対する

支援も含めて、現状と課題ということでお話をいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○飯田准教授

よろしく申し上げます。今日は貴重な機会をいただきましてありがとうございます。私は、スクールカウンセラーとして、不登校の子どもや親御さんに関わってきています。中学校で10年ぐらいやっていて、高校や大学では、学生相談などをして、いろいろな子どもと関わらせていただけてきました。今はその経験を生かして、大学や大学院で、不登校のことやいじめのこと、障害の子の支援などを伝えさせていただく形で関わっています。ですので、主に、個別のケースや、学校で不登校の子が何人かいたときにどう対応するかという学校レベルの対応と、個別レベルの対応がこれまで中心だったので、このように市全体での取り組みに関わらせていただける事は、すごく、私にとっても貴重な機会で、やはり学校をバックアップする機能として、こういう市の取組というのは非常に影響が大きいだろうと思いますので、各学校に共通する課題とかを、少しでも考えることができたらいいいのかなと思っています。

今日、いくつかお話をいただきましたので、その点についてお話をさせていただければと思っています。

まず、最初に、今までの検討部会の資料を拝見させていただきまして、それに関して、少しお話させていただければと思います。対応として、いくつかの観点があると思いますが、不登校対応で一番要になる対応というのは、通常の学校で働いている先生方の教育相談ということだと思っんですね。通いたくなる学校づくりというところなので、不登校のことでその人数が増えるということはすごく気になるころではありますが、一方で、ものすごく学校で楽しく過ごしていたり充実感を持って通ったりする子ども達もいるというところで、各学校が今やってることの中にも素晴らしさがある、多

くの子が通えているというところもある。そういう各学校の良さみたいなどころも、自分の学校の売りというか、いろんな教育支援が行われているんだろうなというふうに思います。ちょっと余談になりますが、大学の授業でこの春にレポートを課して、自分たちが経験してきた小中高の援助サービス、援助を受けた経験を、学校心理学の枠組みで書いてくると伝えられた時に、自分の通った学校は、全ての子どもを対象にこんな援助サービスが行われていました、二次的に気になる子に対してはこんな援助が行われていました、三次的に個別の支援が必要な子に対してはこういうことが行われていたんじゃないかと思えますと、自分の学校経験を振り返って、小学校や中学校の時、先生方がこんなことをしてくれていたんじゃないかということ結構たくさん書いていて、その時はわからなかったけどと書いていて、だから、多くの援助を、今通っている子どもたちは経験しているというところがあり、それで何とか持っているというか、学校に行かなくなるということではなくて、学校に居場所があり救われている子もたくさんいるのかなと思うのが一つです。

ただ、やはり不登校は、本当に背景が様々で、うつとか不安障害とか診断がつくような状態にある子もいますし、精神疾患の場合もありますし、どうしても学校との折り合いがうまくいかない、学習上の課題とか発達上の偏りとかでどうしても学校生活が本人にとって辛い場所になってしまって、二次障害というか、自信がなくなるというところで、毎日は通えないという子もいます。あとは、家庭が子供を送り出せない状態にあるという家庭の福祉的なニーズや養育上の課題がある場合もあり、学校がどんなに充実していても通えない子は出てくるので、そのような子をどうしていくかは、市単位で取り組む課題なんだろうと思っています。そういう意味では、資料を見せていただいて、校内においても、不登校の状態にある子が通える場所を作るという取組を、中学校で1校始めていて、これは良い取組だと思います。もう10

年前以上になりますが、私もスクールカウンセラーをやっていた時のことですが、私が勤めていた中学校は規模が大きく、600人位の中学校で、不登校が30人以上いたんですね。30人以上いて、10人ぐらいはその教室があることで、通えていたと思います。欠席もありますが、そのうちの5人6人は、もう皆勤状態。本当に来れていたんですね。教室には行けない、教室の文化には馴染めない、教室の元気で明るい文化には馴染めないが、自分の好きなことがしゃべれたり、アニメのこととかがしゃべれたりする場所があれば来られるという子はいるので、各学校に、中間学級といいますか、教室を作るといふ取組は広がってほしいと思います。実際これは、全国でも注目されている取組で、この間、朝のNHKの「おはよう日本」ですかね、そこでも、柏市が全中学校に別室登校を作って先生を配置するということをした、その予算を取ったということが、朝のニュースでやっていて、すごいなと思いました。学校に来られる子は学校でサポートするというのが、一番、御家庭の負担も少ないですし、本人も自分の学校に通えているという気持ちを持てるだろうと思います。その取組に期待したいと思います。

あとは、学校という文化が合わなかったり、本当に来られる時間が少なくて学校の雰囲気が合わなかったりする場合は、学校外の施設を使うと思います。学校外で自分が学びたいことを学べたり、そこの先生と相性が良かったりということもあるかもしれないですね。つくしの広場やむすびつくば、ここに広場や民間フリースクール等を使う方針を検討されていて、もう実際に始めて使ってらっしゃるようですが、そこを市の教育と連携する場所として積極的に活用していくという方針が検討されてきているのかなと思っています。そのような場所が合う子にとっては、選択肢が増えることになると思います。

家庭にいる児童生徒への支援ということで、オンラインの活用なども検討されているかと思います。本人と保護者とフリースクールを対象としたアン

ケートを今検討されているということで、当事者の声を聞くことは非常に大事なことだと思いますし、今まであんまりされてないんじゃないかと、他の自治体でもされてないかなと思います。すごくチャレンジングな、でも大事なことかなと思うので、子どもたちや保護者が回答しやすいように、オンラインと紙の両方が使えるようにできるといいのではないかと思います。その検討資料を見せていただいた上で、知りたいなと思った情報なんですけれども、大学の授業などでは、不登校は今18万人を超えてと言うのですが、18万人となってしまうと、どこから手をつけていいかわからないし、どうやってその数値を捉えていいか。私も教えながら、要因なども伝えるのですが、一人一人を見ていくのは難しい数字になります。つくば市の不登校の数は592人ということで、一人一人が見られる人数なのかなと思うので、各学校にどのぐらいの不登校の子がいて、その子をどのように捉えていて、どう対応しているのか。その対応やサービスができていうことがわかれば、人数が多いことが問題ではないと思います。放っておかれている子がいないということが大事、何かそのまま時間が過ぎてしまっていることがないということが大事なのかなと思います。この子は、今、精神的に不調で、でもカウンセラーが週1回家庭訪問して、元気なときには、担任とオンラインでつないで、週3回ぐらいオンライン学習していますなどと、対応ができているときには、教育が止まってないということかなと思うので。不登校対応も法律ができたことで対応の方針が変わっているので、社会的自立に向けて、こういう計画でこういうふうに行っているということが追えるといいのかなと思います。私がスクールカウンセラーをやっていたときに意識していたのはそういうところで、スクールカウンセラーも週1回で、その時は8時間でしたが、その8時間働かせていただく中で、自分の学校に通っている子どもたちの30人の不登校の子がどういう状態かというのを把握しようとするのが難しかったですね。クラスによって、先生方の忙しさによって、方針が立

たないまま、何ヶ月も経ってしまう子がいなくどうか、十分対応できてない子がいなくどうかを、学校全体としてどうフォローするのか、また、市はそれをどうモニターするのかということはあるかなと思います。資料に関しては以上です。

次に、今まで関わった事例等からの不登校児童生徒の実情等についてですが、先ほど少しお話したように、不登校の背景は非常に多様で、教室には行けないけれども学校には来られる子、この子たちは学校に居場所があれば来ることができるので、エネルギーが下がっているとか精神疾患があるとかではなくて、この子たちが悩んでいることは、教室の子どもたちと会話が合わないということを言いますね。人との違いに悩んでいる子が多くて、経済的な背景だったり慢性疾患を持っていたり、それを思春期になると隠したいというような気持ちもあって、小児の慢性疾患などを持っている子が周りに知られたくないという子もいました。外国と関係がある子が、育ってきた文化が違って、「かるた」をやったことがないとか、何か日本人の子が普通にしゃべることがわからなかったり育ってきた背景が違ったりということで、思春期に入る、中学生辺り、小学校の高学年辺りから、人との違いに悩み始めて、教室に行けないっていう子がいると思っています。あと、学校そのものがしんどく、通うのが難しくなる場合もあります。発達障害がもともとあって、学び方とか対人関係の持ち方が人と違って、それから来る、自己肯定感とか自尊感情の低下、二次障害と言われるところですね。そうすると、うつになったり不安障害になったりしますので、もともとは発達の偏りなんですけど、もう思春期になると不安障害で、人に会えない、家の中で隠れて暮らしている。外にも出られないというような子もいます。精神障害があるという場合もあります。ここも本当に見落とされがちで、子どもを見る精神科の専門医も少ないようで、診断があまりついてこないの、何か見落としがちなんですけど、数年前に、小中学生でうつ病と診断される子どもが1.5%いると

いう報告がなされています。これは傳田先生という児童精神科医の先生が行った調査ですが、うつ病と診断されるレベルの子が1.5%で、うつ傾向だともっと増えるという報告があります。この状態では、学校に通い続けるというのはかなりきついことで、状態を見極める必要があると思います。頑張れということでは難しいので、医療との連携や本人の状態に合わせた支援が必要だと思います。治療的家庭教師の派遣の活動をやっているNPOなどもありますが、（そうした状態の子どもとの関わりを）勉強している人が、家庭訪問や家庭教師に行くとかオンラインとかで支援することはできるかなと思います。

もう一つ非常に難しいのが、家庭の問題です。虐待、ネグレクト、ヤングケアラーの状態にある子どもとか。中学生になるとネグレクトの家庭でも、子どもが自分で学校に来られるのではと思うところもありますが、親に期待されていなかったり親にケアされていなかったりすると、意欲が湧かないと思います。行っておいでと言われたい。私に関わった子の中で、食卓にお金だけ置いてあるという子がいました。そういう時に、学校の先生は何とかして迎えに行こうと、分担して迎えに行きました。養育の問題だけではなく意欲の問題もあり、こういう状況のときSSWの人に入ってもらえることが今すごく、心強いと思っています。私もSCをやっていましたが、SSWの人の見解はまた違う意見といたしますか、私たちの選択肢にない、例えば、この夏休みに食事が心配な子供がいたときには、SSWの方から「子供食堂につないでおきました」とおっしゃっているのを聞きました。その選択肢はSCではなかなか浮かばないと思いました。何とかして社会資源につなぐという意識がSSWの人は強いので、心配な子供がいたときに、SCとSSWと両方意見を聞いた方がいいと思っています。逆に、心理の強さは、見立てとか、子供の発達の偏りのこととか、親と信頼関係を作るということが強いので、どちらにもケースに関わってもらった方がいいと思っています。直接何かを頼まなくても、今頼

めることないという声を現場の先生から聞くことがありますが、意見をもらうだけでもいいといいます。こういう子がうちの学校には何人かいて、どうい
うサポートが考えられますかと尋ねるのもいい。すごく深刻な、虐待で児
相につながなければいけない状態の時に、SSWに入ってもらっただけではなく、
気になっていてどういうことが考えられるかというところで、SSWの意見を
聞くと、より多くのケースにSSWの専門性が生かされると思います。

次、3点目ですが、内地留学では、つくばからも、全国からも来ていただ
くことがあります。そこでは、現場の話聞かせていただいて、私たちもす
ごく勉強になりますし、一緒に学ばせていただく、学生や大学院生にとっ
ても、現場のことをお話いただいて非常にありがたいのですが、内留で来られ
る先生は、教育相談の要でやっている先生が多いので、その先生方が、3か
月とか6か月とか学びに来られて、戻ったときの効果というのはすごいと思
っています。現場の先生は、良い実践をたくさんされているのですが、よく
自己流なのでとおっしゃって、これでいいのかなと思っているところを、心
理学の授業を3か月とか6か月とっていただくと、理論などで意味づけがで
きるので、これでよかったんだと思うことが多いようです。現場に戻って、
コーディネーターの仕事につかれて、特別支援教育コーディネーターや、教
育相談や生徒指導の中核になられて、若い先生をサポートしたり、外部の資
源と積極的に繋がり、内留に来られて戻られた後の先生方のお話を聞いて
ると、すごいなと思っています。ですので、これは是非、要望というか、中核
の先生を出すことは今難しい状況だと思うのですが、学びたいという先生に
是非、機会を与えていただいて、戻った時にすごい中核になるので。こうい
う先生がいないと、学校は、バラバラになりやすい、担任の先生次第となり
やすい。担任の先生次第になってしまうところを、どのクラスでも、援助サ
ービスがきちんと行われるということを実現するために、コーディネーター
が非常に大事ということが言われていて、コーディネーターを育てるという

研修講座に取り組んでいる自治体は多いですが、県のコーディネーター研修などは、年間4日間程度になってしまい、それだと、学校の援助の中核になる自信はどれくらいつくのかなと思います。内留は非常に貴重な機会だと思っています。ちょっと余談ですけども、学校の中で心理学のサービスを提供する職業というのは世界中にあって、イギリスでは、学校の先生が1年間心理学を勉強して、エデュケーションナルサイコロジストになり、学校の先生方に助言するという形で専門家が動いていますが、何かそれに近いなと思うんですね。現場をよくわかっている先生で、担任や教科指導をひと通りやっている先生が、心理学を勉強していただいて、現場に戻ったら、本当に上手く心理学の知識を使っただけのだろうと思っています。

最後に、4点目ですが、不登校対策と不登校児童生徒への支援に関して必要なこと、期待することということで、大きなことというか、こうだったらいいなということを申し上げますと、まずは不登校対応の一番の窓口、ファーストコンタクト、常にコンタクトしているのは先生なので、先生方の研修ですね。発達障害の子に対して、まずい対応をしてしまうことなどがあると思います。知らないから言葉かけを間違えてしまうことがあると思うので、発達障害に関する理解と支援や保護者対応、また、学校の風土がいいと不登校もいじめも減ることにについてはエビデンスがあり、学校のいい雰囲気を作るやり方について、西の方では「ポジティブ行動支援」というのが流行っているんですが、叱るのではなく、約束事を決めておいてできたら褒める、褒めることを増やすことで、問題行動を低減していくような関わりがありますが、そういった知識などの研修があるといいと思います。

あとは、コーディネーターを中心とした校内支援体制の整備ということで、コーディネーターが自分の学校に通っている子ども達のニーズを把握している、不登校の子一人一人のニーズを把握していて対応方針が立てられていて、その方針に基づいた援助が行われていて、その援助がうまくいって

るか、モニターすること。

あともう一つは、期待とといいますか、保護者支援ということで言うと、子育てが難しくなってしまうている、育てにくい子だったり育てるのが難しかったりという、子供は皆同じではないので、子育てに難しさを感じている親御さんだったり、子育て全般が難しくなっている、子育ての経験が自分にはあまりないと感じている親御さんがいたりした時に、家庭の支援を早い段階から始めることができればいいと思います。大体、小学校高学年から中学校で不登校が始まりますが、その前の段階から、不登校になってから親と繋がるというよりも、何か子育てで心配なことがあったり子育てのスキルを学びたいと思っていたりする家庭は、何か学校にちょっと集いがある、ドーナツでも食べながら、コーヒーでも飲みながら、学期に2回ぐらい、子育てのことを、専門家に聞く場があるといいと思います。発達障害の子供を育てる上で、ペアレントトレーニングというものがありますが、それを学校のスクールカウンセラーができたらいいなというのは、理想に近いですが、あったらいいなと思います。私自身、今、子どもを育てていて、小学生と中学生ですけれども、すごい子育てが難しいと思うときがやっぱりありますし、各段階、段階で難しいですね。子どもが次の発達段階に入ると、今までなら素直に聞いたところが、すごい反発を食らうこともあるので、親のスキルも学べたり同じ立場の仲間と話せたりする場所があるといいと思います。中学校になってから、不登校になってからということではなくて、もっと前の段階から、親をサポートできたらいいなと思いますが、これはちょっと学校教育からはプラスアルファのことになるかもしれないので、スクールカウンセラーとか児相とか、そういったところとの連携で困っている親が支援できればいいなと思っています。ありがとうございます。

○教育長

ありがとうございました。まず、最初に、先生が知りたいとお話をいただ

いた、590人にもなると一人一人をしっかり把握してニーズに合わせた指導が難しいんじゃないだろうかという、極端に言うとおかれておられるような子が出てはいないだろうかというようなところで、これを学び推進課の方で答えをお願いします。

○事務局

飯田先生ありがとうございました。背中を押していただいたような感じがします。本当にありがとうございました。一人一人を見取るというか、その対応ということでお話をいただきました。つくば市には今、600人弱の不登校児童生徒がいて、学校数も多いのですが、残念ながら数が非常に多くなっているということです。各学校でですが、もちろん一人一人を放っておくというわけではなくて、当然担任を始め、担任だけではなく、生徒指導主事であったり、学年主任であったり、養護教諭、管理職と、チームで対応してくれていると思います。それぞれ、例えば、不登校が出た場合には家庭訪問に行くとか、担任だけではなくて学年主任と一緒に試みる機会があったりはたまた養護教諭が関わってみたり、そういったことで対応はしてくれていると思います。先生のお話を聞いていて、各学校では、不登校があった時に、一生懸命対応はしてくれているとは思いますが、私も自分の経験はありますが、とりあえず家庭訪問に行きました、継続して家庭訪問しています、もしかしたら、そこで終わってしまっていることがあって、例えば、それを3ヶ月続けてみました、その時の子どもの様子の変化はどうだったのか、何かいいヒントはなかったのかという、振り返りとか、反省という言葉が違いかもかもしれませんが、そのような部分が、もしかしたら自分の経験上、足らなかったのかなというふうに、今、振り返ってみて感じました。各学校で、どのような背景や原因なのかをなかなか突き詰められないお子さんもいて、不登校の理由が、これなのかあれなのかと迷う部分もたくさんあり、関わりはするのですが、なかなか細かいところまで引き出せていないというところ

ろがあるのですが、やはり一旦立ちどまって、自分たちの対応を振り返って、何かいいヒントはなかっただろうとか、ここをこう変えてみるといいのかなとか、たまには接する担当教員を変えてみるとか、そういった工夫というものをしていくことが大事なのかなと感じました。各学校どのように具体的に取り組んでいるかを一つずつ説明できればいいのですが、そこまで我々も把握していないものですから、申し訳ありません。間違いなく、各学校とも一生懸命やってくさっています、自分を振り返ってみると、その振り返りという部分が足らなかったのかなというところで、今後のいいヒントになったと思います。ありがとうございました。

○教育長

確かにそうですね。家庭訪問できて本人と会えるとか保護者の方と会えるとかという段階で、何か安心してしまうというか。それは大事な役割だと思いますが、では、学校に帰ってチームで相談して、具体的にこの先どうするかというところで、なかなかいい案が出ないまま、それが継続されているような状況があるのではないかということですが、飯田先生いかがですか。

○飯田准教授

学校では、先生方のチームで行われていると思いますが、スクールカウンセラーに話だけでも聞いてみたり、スクールソーシャルワーカーに少しでもケースを見てもらったりすると、違う視点が出てくるかもしれないです。いじめ防止対策推進法と同じように、教育機会確保法でも、不登校においても、心理の専門家や福祉の専門家の助言を受けるようにという規定があるので、ケースに多様な視点で関わる、見るのが大事かなと思うのが一つです。

あと、今日資料に出させていただいた文科省が出している不登校の調査結果で、不登校のページは14ページから始まりますが、18ページを見ていただければと思いますが、今回概要というのが文科省から出されていて非常に色もついてわかりやすい、いくつかポイントが示されていますが、不登校の子

のうち学校内外の機関で相談指導を受けたという子が12万8,833件で、学校内外で相談指導を受けてないという生徒が6万7,294人。右のグラフでいうと、65.7%は指導を受けている、34.3%が相談指導等を受けてない、というところで、この数字が何を意味してるのかということなんですが、家庭訪問ができる状況で、会える子がいれば行って、先生方本当に大変な中家庭訪問に行っているわけですけども、来てほしくないと言われた家庭とか、連携がとりづらい家庭はどうなっているかということが気になります。そういうケースに、その家庭が利用している医療機関があれば医療機関と連携をとって状況を伺うとか、健康面で会えないということであれば、診断書や医師の所見、見解などがもらえるとか、また、家庭がどうかという場合には、児相に連絡をするとか子ども家庭サポートセンターなどの地域に根差しているところに相談してみるとか、相談指導を受けていないという子の割合を減らしたいと思います。あと、右下のICTを活用した出席扱いとしているというところですが、このデータをこれだけ出していることにどのような意味があるのだろうと、もっと積極的にということなのか、メッセージが読み取りにくいですが。文科省はICTを活用した学習活動を認める方針を出していて、去年はこれでしたということなので、人数的には非常にまだ少なすぎるかなと思うので、条件を満たしてここをもう少しできてもいいのかなと思います。

○教育長

学校は何とかコンタクトを取って繋ごうとしているが、家庭は来てほしくない、子供も会いたくない。そのような状況の子はどうか、いつも心配なのですが、つくばでもそのような報告はあると思うが、どうなんでしょうか。

○事務局

不登校の子どもが自分のクラスにいる場合には、まずは家庭訪問をどこの先生もやっけてくださっていることです。私も経験はありますが、会える子が

多いですが、なかなか会えない子もいます。また、鍵が閉まって、いつ行っても何時に行っても、家庭の方にはなかなか会えないという子がいたのを、今でも覚えております。私がまだ担任をしていて若いころは、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーがあまりいなかった時代ですので、もう我々頼みでしたが、最近は各学校とも、家庭に行っても繋がれない場合には、スクールソーシャルワーカーを頼んで、家庭訪問してもらうことを活用しているようです。一方で、ワーカーをしてでも、なかなか対面で会えないという報告もいただいている、欠席日数についても150日を超えるような子も結構いまして、なかなか子供にも会えません、親にもコンタクトがとれません、ワーカーを使ってもなかなかというところが、各学校でも一番苦慮しているところであるという話は聞いていて、この辺りを我々として何とかお手伝いできないかなと考えているところですが、なかなかいいアイデアというか、案がなくて、悩んでいるのが実情です。

○教育長

そうですね。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーをお願いできるというのは、以前に比べると、すごく大きなことですがね。しかし、それがまだまだ足りないんじゃないかというのがこれまでの議論なんですけど。

ここからは、委員の皆様から質問や、これからの支援を考える上で、ぜひアドバイスいただきたいことを中心に話をしていければと思いますが、いかがでしょうか。委員、お願いします。

○委員

お話ありがとうございました。内地留学は、つくば市の取組ですか。内地留学、内留という言葉は初めて聞いたので、すいません。よろしく申し上げます。

○教育長

内地留学というのは、まず、本人の希望や学校の希望で、県が人事的な研修として行うものです。本人、学校の要望を、論文などと一緒に県に提出し、選考されて合格すれば、大学や研修センターに3か月から6か月、長いものは1年通って勉強することができるもので、スタートは、本人や学校の希望からということになっています。

○委員

ありがとうございます。実際、どのぐらいの方が受けているのでしょうか。1つの学校の単位で1人出たり、出てなかったりくらいですか。

○教育長

受けられる人はかなり限られています。県全体、小中学校で多分50人ぐらいしか1年に行けないと思います。つくばでも4、5人くらいか。

○事務局

そんなに行かないです。1年で2、3人です。

○教育長

問題の一つは、今の教員不足で、学校で出したいが、その補充に来てくれる先生がいないという状況で、なかなか出しにくくなってしまっているというのが校長先生方の声であります。本当はもっと勉強してきてほしい、代わりにクラス見てくれる人が来るなら出してあげたいという状況にはありませんかね。

○委員

免許更新をやめたから、少しは出せるようになるのではないですかね。

○委員

分野も多岐に渡っていて、教育相談関係では、県でも2、3人くらいですよ。

○委員

ありがとうございました。

○委員

先ほどの学校内外の機関で相談を受けていないという子どもが34.3%。私も衝撃的な数字でしたが、実際には、何らかの相談は受けているんだろうけど、それを学校内外の機関としているからかなと思ったり、上の数字ともダブったりしているので、いまひとつよく理解できない数字ではあります。ただ、現場のSCやSSWの話も聞きましたが、もう完全にキャパオーバーであることは間違いない。キャパオーバーで、この数字が出るのではないかとは思いますが。そうしますと、ちょっと引っかかるのは、学校内外の機関等の「機関等」が気になります。担任や学校の生徒指導の先生に相談したというのは、その中に入っているのかちょっとわからないなと思えます。実際には、もう本当に全く相談を受けられてない人っていうのは、おそらくそんなにたくさんはいないと思えますが。そうしますと、私は、支援体制の有機化の中で、うまくネットワークしたり協力したりする体制が、今ひとつまだ整ってなくて、その中で、スクールカウンセラーの役割というのが、時代の流れといえますか、位置付けが変わってきたような気がするんですよ。先ほど、イギリスのエデュケーションナルサイコロジストという、先生方にどんどんカウンセリングできるような技能を身につけてほしいという文科省の動きもおそらくちょっとあったと思うんですよ。ただし、カウンセラーの専門性、心理主義に陥らないようにというのはありながら、子どもたちの心に個人的に向き合う姿勢というのは、やっぱりスクールカウンセラーのすごく大事な役割ですが、それがきちんと専門職として担保されているのかなという心配です。スクールソーシャルワーカーが入ってきて、実際にケアに動いてくださいということになってきましたけれど、これも全然、人的支援は足りないと。先生方も家庭訪問に行くけど、なかなかその先ができないとか、結局全体が有機的に動いていないような気がするんですね。教育行政とか教育委員の立場からすると、そここのところをうまく、マンパワーが回るようにしてあげる

ことが仕事かななんて思うんですけど。そこで一つ聞きたいのですが、医療ではトリアージと言われますが、こういう子どもの、こういう問題については、やっぱり担任がやるべきだよとかね。これはもしかして医療につなげなきゃいけないとかね。子どもによって、状況によって、随分違うと思いますが、そのトリアージを誰がやればいいのか。コーディネーターと言うけど、特別支援コーディネーターはいるが、不登校支援のコーディネーターも一緒にやっているわけではないですよ。そうすると学校の中で、本来そういうコーディネーターが必要で、交通整理しながら組織全体の相談事業を動かしていくという役割が必要じゃないかなと思うのですが、どうお考えですか。

○飯田准教授

本当におっしゃる通りだなと思って聞いていたんですが、コーディネーターがトリアージをやるようにというところなんですけれども、特別支援教育コーディネーターは指名されていて、教育相談と生徒指導の事務分掌もあるところが多いというところで、学校によっては、特に小さい規模とかだと、これをもう全員同じ人とか2名とか指名して、一緒にやってもらうということで、特別支援と教育相談と生徒指導は分けられない部分が多いと思うので、委員会も同じにして、委員長も同じにするという実践も聞いています。その人がトリアージすることがすごく大事ということは言われています。最初の判断ですよ。初期判断で、情報を聞いて、誰にこのケースを任せるのか、これは担任中心だとか、SCに繋ぐというのがすごく大事というのは、本当にそうだと思います。

○委員

何でもかんでもカウンセラーに話がいつちゃって、もうこれは完全にキャパオーバーになること間違いないと思うんですね。1回話を聞いたら、次はもう何か月後じゃないと予約が取れないと。学校単位で、学校のことを見てあげたいが、学校を何校か見ている、いろんな学校をグルグルグルグル回っ

ていて、もうちょっと話聞きたいんだけど、すごく心配だった時にそれがなかなか繋がらないと。だけど、どんどん予約が入ってくるから、話は聞くと
いう、そういうなんかジレンマを、カウンセラーの方からこの間聞いたよう
な気がします。その辺をうまくやっている自治体の例とかありますか。

○飯田准教授

そうですね。今の人的支援だったら教員が中心というのは変わらないの
で、先生方がカウンセリング研修をすることは、20年くらい前は非常に盛ん
だったと思います。カウンセリングや話の聞き方、エンカウンターなどすご
く行われていたと思うのですが、今はほかの役割の研修が多くてあまりされ
ていないという気はしています。話の聞き方、保護者の相談をどう受けるか
をやるだけでも違うのではないかと思います。

○委員

新任の研修とかに入れているのでしょうか。特に、新任の先生には大事だ
と思いますが。

○教育長

初任者研修の一つのコマにはなっているので、やってはいると思いま
すが、時間数が十分にとれているかは、もの凄いコマ数をいろんな内容でや
っている中では、まあ、十分ではないのかなというのは思いますね。私も生徒
指導主事に初めてなった時には、カウンセリング研修をやりましたけれど、
それでも2日間ぐらいしかやりませんでしたので、自信を持ってできたか
といとなかなかそこも難しい。とにかくこの教員に求められるものとい
うが多岐に渡っているというのは、非常に難しいところかなと思います。そ
の中で先生方に、あなたは生徒指導を中心にと、何か役割分担というのも必要
なのかなとは思っています。

○委員

飯田先生ありがとうございました。私も、気になっていることは、さっき

も話題に挙がったように、家庭内に引きこもって外での相談指導を受けていないというのが34%以上あるということです。これは大きな問題だと私は思います。これは昔だったら心因性などの問題で会えないとか、担任がうまくつながりが持てなくて会えないとかそういうのが多かったんですが、今では、家庭の問題でこういう状況になっているものが増えているのかなとつくづく思うんですね。家庭の無理解や虐待までいかななくてもいろんな要素が絡んでいて、不登校になっている場合もあると思います。その時に、前も私言いましたが、こども家庭庁を立ち上げたが、不登校対策は文科省だけで担当するというのは、私は違うと思います。連携して、お互いに情報交換して対策を講じなければならない事例も、多々あると思います。その辺が縦割りではなく、もっと柔軟に対応できるようなものが今後は必要なのかなと思います。学校で私が実践した時は、ケース会議を必ず開きましたが、場合によっては保護者もそこに入れたり子どもの状況によっては児童相談所の人の中には入ってもらったりと、役割分担ではありました。1人の先生で背負わないような体制づくりというのは、学校で当然必要なもので、そういう意味での役割分担というのは、今後さらに拡大していく必要があると、私は思うのですが、先生、この辺りはどうでしょうか。

○飯田准教授

本当にそうだと思います。学校入る前の段階からずっと、家庭をサポートするということが一貫したことなので、こども家庭庁と連携していく、一緒に対策を立てていくことは非常に大事だと思います。

このデータですが、元になっているものは、100ページぐらいあり、先生の指導を受けているとかSCの指導を受けているとか、細かい項目があり、それを受けていない人たちの数字です。この資料をどのように見たらいいか、今、お話し伺っていて思うのが、最初から連絡が取れないという家庭もあるでしょうし、学校とのこれまでのやりとりで、もう連絡とりたくないとなって

しまっている家庭も一部あるだろうと思います。それは先生が言ってくださったように、保護者の意見を聞いて援助を立てているか、会議に保護者も入れて、保護者も一緒に、パートナーとして取り組んできていけばいいですが、学校は一生懸命やっているんだけど、それが家庭に伝わっていなかったり、何か違うことをやられてしまって、うちの子がさらに頑なになってしまったという対応もあったりするので、家庭との関係の作り方はすごく大事だと思います。

○委員

むしろ、支援拒否というところもありますよね。

○飯田准教授

ありますね。先生が来てもっと状態が悪くなったとか、望まないことをされたとか、一部あると思います。一方で、やはり関係が取りにくい、養育の問題がある親もいるので、そこはもう専門家に入ってもらうということだと思うんですが。こじれてしまったケースもあるのかなとは思いますが。

○教育長

まあ、そうですね。はい、委員。

○委員

もう一つ、カウンセリングについてですが、ピアカウンセリングについては、まだなかなか広がらないというか、子ども達同士とか、低学年の子たちと高学年の子たちが小さいグループで話をするとか。カウンセリングの考え方を、学級運営や学校運営の中に、もう少し普通に取り入れていくということが大事かなと思うんですよね。

あと、先ほどの保護者の件でも、昔はPTAで、何か困り事があればお互いに相談するみたいなことがありましたが、PTA自体がすごく変わってきたので、保護者のコミュニティーがなかなかつくりだしていないということも問題かなと思います。学校のピアカウンセリングについては、どうでしょうか。

○飯田准教授

つくば市では、取り組んでいる学校がありますね。私も聞いていますが、小・中学校で何校かやっていて、やっている人から聞いていて、継続して取り組むとすごく雰囲気良くなると聞いています。困ったときはお互い様という、助け合う風土を作っていくことは非常に大事なことはないかと思えます。

○教育長

ピアカウンセリングをやっている学校は、授業の雰囲気もいいですね。授業の時の相談も自然にやっている感じがあります。飯田先生から最初に、不登校にならないような学校づくりが大事であるとの話がありましたが、できるだけそういう学校を私も作らなくてはと思っています。いろんな子どもの相談を受けながら、通いたくなる学校は、そういう子にとってこんな学校なんじゃないかというあたりは、どのようにお考えなのか、ちょっとお聞かせいただければと思います。通いたくなくなるのは、こういう要因というものもあるのかもしれませんが。

○飯田准教授

そうですね。授業なんかでよく言うのは、通いたくなる学校は、環境と個人の折り合いが良い状態ということで、大人も同じかなと思うんですね。大人がいい雰囲気だと感じると、子どもも同じように感じると。筑波大学元教授の田上不二夫先生が言うのは、人間関係があるということと、楽しい活動楽しい時間があるということと、意味のある活動ができているということが、環境と子供・個人の折り合いが良い状態、これは行動療法の観点からになります。そういうことで言うと、人間関係がある学級づくり、この子にとって楽しいという時間があるかどうかということと、あと、意味のある活動でいうと、今子供たちの価値観や関心は多様だと思うので、大人が考えても楽しそうな活動、みんな一律で同じことを学ばなくてもいいかなと思いま

す。選択で、プログラミングが学べたり、ダンスが学べたりアートに打ち込めたり、これは小中学校の段階ではどうかなと思うのですが、私自身がアメリカの高校を出ている関係で、高校から授業がかなり選べました。昔日本でも、選択授業がありましたよね。5教科は、今では塾でもインターネットでも学べる時に、子ども達がわくわくすること、学びたいと思うこと、どういうものがあつたらいいのかなと思ったりします。地域の資源を活用して、いろんな大人が教えに来てくれるなども楽しいかもしれないです。

○教育長

委員、今お子さんは小学校に行っていますけど、こんなことがあつて楽しかったとお子さんが言うのはどんな時ですか。いきなりの質問で申し訳ありませんが。

○委員

昔も今も給食と図工。一方で、図工や道徳が苦手という子どもいらつしゃつて、それは、先生の指導の仕方に問題があるのかなと感じることはあります。そこはもつたいないなと思います。

○教育長

図工、私は苦手でした。なぜ苦手かというつ、いいものを作らなくてはいけないというつ、上手く作らないといけないという、何かプレッシャーを感じるような気がして。私はきつと負けず嫌いだったからそうなのかもしれないつ、そういうものを求める図工というのは、きつとまずいかもしれないと思います。

飯田先生、先日、学校の先生と話をしていたら、先ほどの資料下のグラフでの自宅におけるICTの学習を出席扱いにするということにも関連があるのですが、不登校の子ども達の学びを止めないためにオンラインで発信してあげた方がいいよと私も申し上げ、学校もそれやってくれるのですが、ある子が「どうせ学校に行かなくてもオンラインでやれるからいいんだ。だから学

校に行かなくていいんだよ。」という話を受けました。昔は不登校にしてはいけないと、親も送ってきてくれたり先生が迎えに行ったりして、何とか頑張ろうみたいなのところがありました。が、外の環境を整えることによって、逆に学校行かなくてもいいやと、学校に行かなくても学べるやということも出てきてしまっているような心配もあるのですが、その辺りについて、飯田先生の御意見をいただければと思うのですが。

○飯田准教授

そうですね。対面の教育ならではの活動や学校ならではの活動で、どのように魅力を出していくかということもあるでしょうし。オンラインの良さや対面の良さそれぞれあると思います。大学の授業もこの2年間ぐらいオンラインでしたが、知識を教えるのは確かにオンラインでいいなという気がします。ただ、やはり話し合い活動がしにくかったり、余白として、授業後の休み時間などに顔を合わせてしゃべったりというのが、大学生のメンタルにとって大事だと思いました。この2年間体調が不調になった大学生も多く、人と会うことは、自分にとって健康に良かったり、メンタルに良かったりするのだと思います。家にいると孤独になりやすいです。ですので、来られる時は来てごらんとか、人と直接会うことは効果があるんだよとか、学校に来た方がいいというところをどれだけ先生方が伝えられるかがあると思います。五感で、体全体で、人と会うことは、孤独も和らぐし、いいことだよと伝えられるといい。

○委員

教育長の話は、おそらく、リアルな人間関係ができた上での話だと思います。全くその関係がないところで、オンラインにより本人が安心できるかと言ったら、それはおそらくないと思います。むしろ、今、コミュニケーション力が無いと言われている中で、そういう子供も出てくると思うんです。むしろ、それはコミュニケーション力がある子の発言のような気がするんです。

よね。もともとリアルなコミュニケーションが苦手な子供は、オンラインでもおそらく苦手だと思うんです。関係性を作ること自体が。今のこの情報過多の中で、ネット社会で心がざわついている。社会自体がざわついている。子ども達もその影響はおそらく受けているので、もっとポジティブに子ども達にメッセージを発して行く。それがオンラインでも必要なのではないかと思います。それがリアルな人間関係の上書きであればなおさらよしと思います。ネットの影響というのは、学習だけではなくて、もっとSNSの世界にどっぷり浸かってしまっている子ども達を想像した方がいいと思います。リアルなコミュニケーション力がある子ども達はいいですが、コミュニケーション力がそこでも乏しい子ども達の孤立感や心のざわつきは、我々の想像する以上のものではないかと思います。そこへ、カウンセリングとしてどう行っていくのか、何ができるのか、何ができないのかを模索しなければいけないと思いますが。

○飯田准教授

オンラインやITスキルなどがすごく高い子で、パソコンで勉強できるという子も今まで関わった中にはいます。今そういう職業もあり、そういう道に進んでいけるというところはあるんですが、行った先はやはりコミュニケーションが必要なんですよね。一緒にプログラムを作るとなるとやはり必要で、その子も人と関わりたいということがなくはなくて、好きなことで人と関わりたいということがあって、学校の友達とは気が合わないかもしれないですが、それを超えれば仲間がいるかもしれないと思います。この間読んだ論文でも、発達障害など偏りがある子は、全般的なコミュニケーションは難しいが、その子がクラスの子ども達と関われる時はどんな時かと言うと、その子の興味があることをみんなでやるという時はうまくいくということで、興味があるものがあり、みんなで群がる時は平和らしいですね。その子をこちらに合わせようとするよりは、オンラインでも、仲間関係を持たせてあげ

られるといいと思います。そこで失敗しても、学校段階ならフォローできると思うんですね。社会で、ネットにはまって、人間関係が駄目になったら、もう本当に孤立してしまいますが、学校だったらその子を気にしてる先生がいて、仲間関係をオンラインでも持つことができ、失敗しても、先生がフォローできるということで、学校にいる間にそういう体験を積ませてあげたいと思います。

○委員

資料の26ページにアウトリーチ型支援の充実とありますが、これは、固定的な先生と生徒の関係ではなくて、もしかしたら昆虫の好きな他の先生とオンラインでならつながれるとか。そういうことではなくて、アウトリーチだからもっと具体的に、先生が学校以外に出て行って興味をそそるようなことをやりなさいみたいなことなのでしょうか。

○飯田准教授

そこを指摘していただいて思い出しましたが、いろんな施設を使うのはいいと思いますが、籍がその学校にあるならば、学校は教育活動を把握する必要があります。だから、必要に応じて、その子が使う支援施設に先生が行ったりそこで関係を作ったり、籍がある学校の先生がどういう教育活動が行われているかを把握する必要があるということだと思います。

○委員

フリースクールに先生が出向いて行き、どうですかと尋ねるというイメージですかね。

○飯田准教授

それもあると思います。

○教育長

では、委員、お願いします

○委員

今伺っていて、私は基本的には、何らかの形では、人と関わることがないといけないのかなと思いました。支援する意味でも、人との関わりが学べないと大きな問題になるのではないかと。私が教え子に言っていたのは、「人を知り、人から学び、自分を知る。」ということ。人間関係づくりが基本になると、ICT活用もいかされないと。SNSの問題でも、安倍総理のこともありましたが、本当に切実に考えなくてはいけない時代に来てるのかなと思います。これからのコミュニケーションの取り方というのは、もう一度みんなで見直していかなくてはならないのかなという気がしてならないです。

○教育長

病気や発達障害などで、なかなか難しいという場合もありますが、それ以外の場合もたくさんあるわけで、そういう中ではやっぱり人間関係をしっかり作っていく。

○委員

発達障害でも、その子どもに興味があるもので関わって、仲良くなるとか人間関係を掴んでいくとか、そのようなことは非常に大切だと思います。孤立させない、1人にしないということが基本にないと問題だと思います。

○教育長

学校の中でそういう指導というか、そういう場面が必要ということだと思います。オンラインも、コミュニケーションで活用できるような授業が必要だと思います。逆に、先ほど言った心配は、さぼり心で学校行かなくてもいいやという場面もあり、どちらなのだろうかということ。そこは、その子の状況をよく掴んで働きかけをどうするかということが、先生にはきっと必要であろうと思います。

○委員

子どものうつということを言われましたけど、どうしても先生方は、頑張りが足りないと思ってしまうので、その理解はすごく難しいと思います。

教育機会確保法で、休むということも大事なんだということ、メッセージとしてきちんと伝えたいし、先ほど心のエネルギーと言いましたが、基本的にはそのエネルギーが溜まってくれば自ずと動き始めるのではないかと思いうんですけどね。その時に、いいチャンスがあるかどうかだと思います。

先生の不適切な対応というのは、基本的に教育関係者にはあるという前提で動かないと駄目かななんて思うんですよね。いい方へ失敗する分にはいいが、気がつかないうちに先生が心の暴力を振るうとかは、気がつかないからこそ危ないというか、そのように感じます。

○教育長

相談を外部に受けていない子どもが、つくばには実際どのくらいいるのかは、私たちとしては、やはり掴む必要があるのかなと思います。それに対して、どのように働きかけをしているのかの確認、教育委員会としては事例によりこんな働きかけが必要ではないかというアドバイス、場合によっては学校でソーシャルワーカーには繋いでいるだろうが福祉部にも繋ぐことなど、私たちが事例に応じて、少しずつしていく必要があるのではないかとこのところですかね。それから、今の話で、通いたくなる学校の先生の対応について、必要な部分が、少し見えてきたかなというところですかね。

また、先生から校内フリースクールが非常に有効ではないかという話をいただき、私も是非そうしたいと思っていますが、校内フリースクールの在り方として、先生のこれまでのご経験から、こんなフリースクールがこんな感じであったらいいなあというところと、担当がいないとなかなか難しく、柏市では担当をつけていくということですが、正式な教員をつけるには定数上の問題で難しいところがあり、市で定数を雇用することは不可能なので、つくば市としては教員OBなどを、非常勤の教員、非常勤の担当者としてつけてもいいのではないかとこの考えを今持っていますが、そのような考えでも大丈夫かということと、そのときにその人に求められる条件、こんな人で、こ

んなことができる人がいいのではないかということ、これらについて、御意見を伺ってもいいでしょうか。

○飯田准教授

校内フリースクールの担当の先生は非常に大事だと思います。大事なこととして、この担当の先生は、通常の先生の役割と違うということを確認してもらえればと思います。学級の指導とは異なり、一人一人にすごく課題があり、傷つきやトラウマを抱えている子たちがいる状況であり、多様な子どもが通っているというところでは、援助が中心になりますよね。普段の教員の役割は指導が中心だと思いますが、そこでは援助が中心になるので、役割を変えられるかどうか、その役割を自分が好きかどうか、そういう子に興味があるかどうか、これらがすごく大事だと思います。今までやってきたことの延長としてできると思わず、教科を教えればいいということではなく、役割の比重は、援助が100%になります。また、そのような子ども達と自然体でいられる、指導とならずに、「よく来たね」「今日体調どう?」と言ってあげられる人がいいと思います。それに興味がある人がいいだろうと思います。役割をリセットできればいいと思います。

○委員

特別支援クラスも同じような発想だと思います。この間の会議では、特別支援クラスもフリースクールみたいな発想でどうですかということ言いましたが、それ見ている他の子ども達も、何か影響受けるのではないかなと思います。校内フリースクールの子ども達にも他の子ども達にもプラスになるっていう発想だと思います。

○教育長

そうですね。他に、校内フリースクールについて、質問やこんなことを考えているということがありますか。はい、委員。

○委員

私も、校内フリースクールは是非立ち上げて、広げていく必要があると思っています。身近に通えるところがあるということは、経費の面でも親の負担は全然違うし、安心するし、支援する枠組みの中にこのような考え方の体制があれば、良い意味で繋がりが持てやすく、学校から離れなくていい、一つの組織体として見守れるというところは、私は非常に望ましいと思います。さらに、前にも言いましたが、そこの学校に通えなくても、違う学校のフリースクールに行ける体制にすれば、そんなに負担にならないのではないかと思う。そこの先生というか配置される人は、外部の支援者に協力を求め連携して取り組んでいくことで効果が上がりやすくなり、初期段階においては基本的には子どもと一緒に楽しく活動できれば、それで十分だと思います。

○教育長

自立に向けてと考えると、そこに来て、自分がやりたいことが自分にはあって、自分やることを決めて、それを先生が支援してあげる。時にはそこに一緒に来ている子ども達と何か交流しながら、自分の人間関係を育てていくみたいな。そんなことができればいいのかなあとは思いますが。先生、いかがでしょうか。

○飯田准教授

居場所をどこかで作ってあげる、それが、校内に来られる子は校内フリースクールでしょうし、自分の学校には通えないという子は別のところになるでしょうし。お話を伺っていて、校内フリースクールを立ち上げるのに、すべて完璧に整わないとできないとなるとハードルが高いと思います。先生と心理士がセットでないといけないとかではなく、週3回でもいいし、私が十何年前に中学校でやったときは、カウンセラーとして、まず最初週1日から始めて、次は大学院生を実習として連れてきて週3回にして、そうしていたら、管理職の先生がこれは大事だと言ってくださり、空き時間の先生方を

全時間に配置してくださり、担当の先生を役割上決めてくださった。ですので、できる範囲からでも始められたらと思います。

あと、適応指導教室に遠くて通えない子には、スクールバスが回ったらいいのかななんて勝手に思ってしまう。アメリカの生活をイメージしていますが、通えないということがある子をどうするかはあると思いました。

○教育長

その子がいつ通うかがある程度みえれば、スクールバスが出せるのですが、その点、すごく難しいなといつも思っているところです。しかし、通えるようにしてあげたいなという思いもあり、つくバスなどもあるので、そのルートがうまくできるといいのかななどと思っはいますが。

今、各学校では、校内フリースクールまでいなくても別室登校という形で、別室を作り、空き時間の先生が担当してくれているという取組は大分進んできていますが、その時に、子どものやりたいことがやれるようにするために、それをコーディネートする人がいるといいのかなあと、そのコーディネートする人が、フリースクールの担当という形で配置されるだけでもかなり違うのではないかと考えています。そのコーディネートする人を、教員OBから雇えないかというのが、今のところの構想なんですね。これからいろいろアドバイスいただいたり、その先生の役割を研修で教えていただいたりしながら、もしできたらいいなと思っています。

最後に、飯田先生が期待することの中に、先生方への研修や保護者への支援というところがありましたが、これも本当に必要だなと思います。先生方への研修について、学び推進課としてはどうですか。

○事務局

研修はとても大事だと思っています。学習指導などいわゆる指導の部分は若いうちからやってきており、得意な教員はおりますが、教育相談やカウンセリングなどは、学習指導に比べると研修時間自体が少し不足しているところ

ろは否めないと思います。これから多様な子どもを見ていくに当たっては、教育相談などカウンセリングマインドは、教員として絶対に身につけなければならない資質能力だと思いますので、悉皆研修を始めとしていろいろところで、全ての教員にそのようなスキル、能力を身につけなければいけないと思います。しかし、つくば市には常勤の教員だけで1,500人位いますので、全ての教員に、一斉にというのは難しいので、先ほど飯田先生からお話をいただいた、内留の先生が学校に戻って広げていくこともやり方の一つなのかなと思うのと、対面での研修はなかなか難しいものがありますので、簡単なものでいいので、教育相談やカウンセリングなどの手引きやリーフレットなどを使いながら、少しずつでも、各教員の教育相談に対するスキルをアップしていくことが大事であると、先日、教育長からアドバイスをもらったばかりでした。まずは、そのような、できるところからでもやっていけるといいのかなと考えております。

○教育長

そうですね。全員に一斉に研修を行うことはなかなか難しいですから。

○飯田准教授

最近いいと思っているのが、いつでも見られる20分位の動画を用意することで、評判がいい。筑波大の附属学校でも、先生方を対象にした動画を今作っていて、いじめ対策や不登校対応など、20分位の動画にして、好きなものが好きな時に見られる。それから、先生方のストレスマネジメント、やはり先生方自身が元気でないと、健康管理ができていないと、生徒と日々接するのも大変だと思うので、そのような研修動画は先生方の負担が少ないということを知っています。集まるとなると、それだけで大変ですが、20分でパッと見られればいいのかと思います。

○教育長

今後は、短い時間で効率よくやる研修は、働き方改革もあるので大事な

かなと思います。私も校長に、時々メールを出して刺激を与えて、校長からも刺激になっていいとの話は聞いています。この間も、学び推進課には、一コラムではないが、一つの事例について、こんな指導をしたらこんな感じで成功しましたというようなペーパーのようなものを、時々、先生方に見えるようにしたらいいのではないかという話もしたところでした。とにかく、研修でガチガチに、話を聞いてレポートをまとめてというと、かなり負担が多くなるので、簡単に、こんなことなのかと気づけるような働きかけができればいいのかなとは思ってはいます。その辺は、研究してかないといけませんかね。

また、保護者支援というところでは、是非、委員の皆様からも、こんなことはどうなんだろう、質問でもいいし教育委員会に対する希望などでもいいですが、何かありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

はい。委員、お願いします。

○委員

私自身、母親クラブというものに所属して、乳幼児のころからのママ友関係というものが今も続いていて、それが大変自分にとっても良いものになっているので、先生のおっしゃったとおり、教育課程だけではなくて、生涯学習課とか福祉課とかそういったものにも繋がっていくことだと思っております。特にコロナ禍だからというのも大きいですが、小学校に入ってから、小学校の保護者同士の集まりといったものは皆無で、奉仕作業が1回あったかなぐらいのレベルです。しかも、兄弟がいたら、そのどちらかに行けばいいぐらいなので、全然知らない。顔も覚えてないというのがあり、小学生になってから信頼できるママ友を作るのは正直難しいなと今思っていて、公立幼稚園だったからこそ、PTA活動をとおして、親同士で何かをやり遂げたという感じで仲良くなったという側面が大きい。本来、小学校のPTAもそのようなことで仲良くなるきっかけだったと思いますが、共働きという現状が、

平日に余計な時間作れないという、教育現場も親もみんな余裕がないというジレンマといますか、その楽しくない雰囲気が子供に伝わってしまっているのが。本来、楽しい時間であればその時間は作るもののはずなので、作りたくなるような魅力ある活動とかをPRしていかないと、このままではただの面倒臭い集まりになってしまう。何とか、学校だけではなく、それこそ、コミュニティスクールのようなものとして、地域として取り組んでいかなければいけないことだと思います。少し話逸れますが、先生同士も、最近はプライベートでの繋がりを持っていての方は少ないのかなという印象があります。本当はそこまでわかり合って助け合うということがあったと思いますが、今は、表面的な業務関係でしか助け合いができないという実情が、少し寂しいものがあると思うこともあります。

○教育長

はい、ありがとうございます。先生どうするのというところ、どうでしょうか。

○委員

いや、これは頭痛いですね。子ども達には先生の仲いいところを見せて、子供が刺激を受けて、あんな風になりたいなどと思ったものです。結局、大人も子供もないんですよね。仲のいい関係を作っていくには、みんなで相談して、協力していく体制が常にないと。PTAだって、集まる機会がないと楽しい企画も生まれません。その中で、このコロナが一番大きな問題でして、集団で集まる機会を阻害しているというのは、人間にとっての一番の課題を突きつけられているような気がしています。それを何とか解決するためには、意図的にお互いに交流を持てる機会や話し合う機会を可能にする場の設定をしていくしかないのかなという気がします。みんな一斉に集まってどうのこうのでもなくてもいいから、少しずつでも立ち上げて、そこから輪を広げていく。今、大人数で全てを集めてどうこうというのは難しいものがあるが、

工夫次第では何とかなるのかなと思います。とにかく、集まることができなくなっている状況を打開しないと私はいけないと思いますし、これからの課題だと感じています。ありがとうございます。

○教育長

飲み会があるときはよかったではなくて、飲み会に代わる、人が交流するものを積極的に作らないと駄目なんですよね。保護者というか、親同士の繋がりを作るという意味では、うちの担当としては、家庭教育学級などもあります。生涯学習推進課と話をした時に、長期で見た時の参加者はどうなっているのかと聞いたら、やはり減っているとのことでした。理由を聞くと、共働きが増えて参加が難しくなっているとのことでした。参加を増やすためにはどうしたらいいだろうか、共働きでも参加できるようにするにはどうしたらいいだろうかと話しましたが、結局、企業の方々の御理解もいただかないとこれは難しいのではないかと。例えば、企業側が、母親学級に出るときは出勤扱いにする、そのように考え方を変わってくればいいのかという話がありました。実際に、家庭での人間関係、家庭の状況が良くなると、職場の状況もよくなる。これはもう言われていることなんですね。ですから、職場で人間関係づくりの研修をやると、職場の人間関係も良くなり家庭も良くなり、そして会社としても繁栄する、お店としても繁栄するという考えにより、企業の協力も是非得られるような働きかけしなくてはならないという話し合いをしました。ある会社の社長さんにそういう話をしたら、それはやってやると言ってくれたので、そういうところがモデルになってくれるといいのかなと思っています。

もう時間もなくなってしまいましたので、飯田先生、最後に総括して、つくば市の不登校支援について御意見いただければと思います。よろしく願いします。

○飯田准教授

この話し合いで、いろいろな観点で意見が出て、これが実現できたら素晴らしいなと思うことが、幾つもあったと思います。やはり市の教育長の先生が参加されて話し合っていることなので、出た意見の中で幾つか、すぐやってみようという動きができる会議で、非常に大事な会議だと思いました。そこに参加させていただいて本当にありがたいなと思っていることと、あと、去年はすごく不登校が増えたということですが、今年度、何か対策をしたら、来年度はどうなっているか。それを見るのがすごく大事だと思っています。何か対策をしても、こちらがだんだん無力感になるという、対策を打った結果がどうだったのか、良くなったり課題が見えたりということが大事だと思うので、今年度1年間いろいろ話し合っただけで、来年度どうなったかが、データで見られるといいのかなと思います。今日は貴重な機会ありがとうございました。

○教育長

本当に貴重な先生からの御意見をいただきましてありがとうございました。またこれからも、いろいろと悩んだ時には、御相談させていただければと思います。本当にお忙しいところ、御出席をいただきまして本当にありがとうございました。

最後に、担当課の方から連絡等ありましたらお願いします。

○事務局

それでは、スケジュールに関して連絡させていただきます。第1回の検討会議で示させていただきましたが、検討会議のスケジュール案では、令和2年度及び令和3年度に実施した協働事業検証のためのアンケート結果や自己評価等について、7月の会議で示しますと御連絡を差し上げていたところですが、7月の検討会議については、今日の飯田先生をはじめ、専門家の先生をお招きしての意見交換ということになりましたので、これらの資料については、8月の会議で示させていただきたいと考えておりますので、御了承い

ただきますようお願いいたします。以上でございます。

○教育長

はい。ということでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

その他に担当の方でありますか。

○事務局

本日は御議論ありがとうございました。次回の会議ですが、7月27日水曜日の午後に予定しております。時間は追ってご連絡をさせていただきたいと思っております。7月27日は、別な先生をお招きして、色々な観点から意見交換ができればと考えておりますので、よろしくをお願いいたします。以上でございます。

○教育長

それでは、以上をもちまして第5回の検討会議を終わらせていただきます。長時間本当にありがとうございました。飯田先生ありがとうございました。